

## 閉会の辞

大野眞男

(災害文化研究会副代表)

副代表の大野と申します。本当に充実した時間だったと思います。そして、アツという間に過ぎてしまったと感じます。閉会してしまうのがもったいないような熱のこもった雰囲気の中で、閉会するという損な役割をさせていただきます。

歳末のご多忙な中をお集まりいただきまして、また、オンラインでご参加いただきまして、誠にありがとうございました。本日は30名を超える方々が会場にご参集くださいましたが、このように充実した、そして、窓の外には雄大な岩手山—今ちょっと見えなくなってきましたが—岩手山が見守る中で、このような形で研究大会をもてましたことは、コロナを挟んで、実は三年振りのことでした。

研究大会の内容につきましては、先ほど山川先生の総括コメントがありましたので省略させていただきますが、一言だけ申し上げれば、山川先生のご講演の中にありました「人間復興」というところにすべて込められているのかというふうに感じました。災害からの復興の主人公は決してゼネ

コンではありませんし、残念ながら国でもありません、やはり地域で暮らす人間そのものでなければならぬのだ、ということを感じました。

さて、災害はなければそれで済んだことはありませんし、来年こそは平穏な年になりますようにと願う時節にもなりましたが、現実的にはそうもいきません。自然災害だからしょうがないんだということではなく、人間社会の問題としてしっかり前向きに受け止め、自分事として災害文化を共有できる、そういう社会に来年こそはしていかなければいけないということを念じつつ、年末の研究大会をお開きにさせていただきましたと思います。

本日はご登壇いただきました皆様、ありがとうございました。そして、ご参集いただきました皆様、オンラインでご参加いただきました皆様、そして高橋産業経済研究財団に改めて感謝申し上げます。終わりとさせていただきます。ありがとうございました。